

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島 嶼 研 だ よ り

No.66

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2013 年 10 月

 主な記事

The Islands of Kagoshima の出版 (桑原季雄)	p1
学生奮闘記「国際協力を通して足元をみつめなおす」 (谷口光代)	p3
シンポジウム「島フィールド学の蓄積・展示・展開」	p4
シンポジウム「地域を変えるカー情報技術による島の振興」	p7
フィールドこぼれ話「船に乗る仕事」 (小針 統)	p11
連載 とうがらしに旅して 第七回 「Rokete はロケット?それとも・・・」	p12

The Islands of Kagoshima の出版

国際島嶼教育研究センター・プロジェクト部会長 桑原季雄

国際島嶼教育研究センターは「島は一つの世界」をテーマにして鹿児島県島嶼を中心とした南西諸島における学術総合調査を実施しています。平成 23-24 年度は鹿児島県島嶼を対象に科学研究費「亜熱帯島嶼域における『小さな島』の多様性に関する学融的研究」を獲得し、同タイトルのプロジェクトをプロジェクト部会で企画推進しました。その成果として書籍 *The Islands of Kagoshima –Culture, Society, Industry and Nature-* を平成 25 年 3 月に出版しました。本書籍は「文化・社会」、「産業」、「自然」の 3 つの章に分け鹿児島大学の研究者を中心に 29 名がそれぞれの章を担当し執筆しました。各章のキーワードとして、「文化・社会」では、宗教、教育、ソテツ、トウガラシ、健康、公衆衛生、社会、闘牛を、「産業」では、奄美振興法、島嶼振興、観光、柑橘、作物、サトウキビ、水産業、再生エネルギー、海藻を、

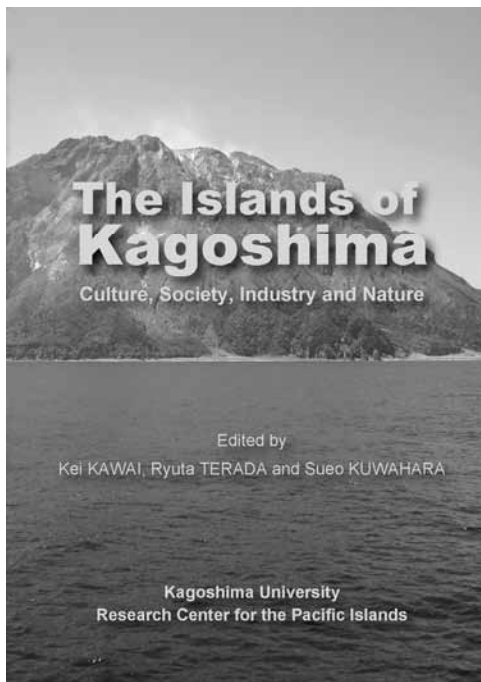
「自然」では黒潮、火山、生物多様性、昆虫相、化石を考慮し鹿児島島の島嶼を解説しています。

平成 25 年は奄美復帰 60 年を迎え、また奄美群島は世界自然遺産候補地として注目を集めています。このように、鹿児島県島嶼域は世界的注目を集めているのが現状で、この地域の情報発信が求められています。しかし、鹿児島県の島嶼について英語で解説した書籍は、平成 13 年に鹿児島大学多島圏研究センターが出版した *BEYOND SATSUMA: Satsunan Islands Accepting the 21st Century Challenge* がある程度で、海外への発信が十分になされてはきませんでした。本書籍がこの様な要求に応え、世界に鹿児島県島嶼域の情報を発信できれば幸いに思っています。

プロジェクト部会では、平成 25 年度は奄美群島を対象にした学術総合調査を行い、平成 26 年度に *The Amami Islands* という書籍を出版し

たいと考えています。また、その後は大隅諸島、トカラ列島、甌諸島を対象にプロジェクトを推進し、国内外へ鹿児島県の島嶼の特徴や魅力を発信していきたいと考えています。このように

国際島嶼教育研究センターでは、鹿児島県の島嶼を海外に紹介する活動を本格的に取り組んでいこうと考えています。



The Islands of Kagoshima –Culture, Society, Industry and Nature–

Contents

Culture and Society

1. Culture and Society in the Islands of Kagoshima (Kuwahara, S.)
2. Research Issues in the Culture and Society of the Amami Islands (Kuwahara, S.)
3. Amami Island Religion -Historical Dynamics of the Islanders' Spirit- (Takarabe, M and Nishimura, A.)
4. The Educational Environment on a Remote Island in Kagoshima (Hatta, A.)
5. Cycads, Sustenance and Cultural Landscapes in the Amami Islands (Hayward, P. and Kuwahara, S.)
6. Chili Peppers in the Islands of Kagoshima (Yamamoto, S.)
7. Health and Medical Issues and Longevity in the Amami Island Region (Takezaki, T., Niimura, H. and Kuwabara, K.)
8. Environmental Hygiene in the Islands of Kagoshima
9. A Guide for the Study of Kinship and Social Organization in the Amami Islands (Nakatani, S.)
- Column 1: Bullfighting on Tokunoshima Island (Ozaki, T.)

Industry

10. Economy in the Islands of Kagoshima (Nishimura, S.)
11. The Amami Islands Promotion and Development Projects, and Socioeconomic Transformation (Minamura, T.)
12. Remote Islands Development Area in Kagoshima Prefecture (Nagashima, S.)

13. Tourism Around the Kagoshima Prefecture Islands (Hagino, M.)
14. Agriculture in the Islands of Kagoshima-Special Reference to Fruit Production in the Yakushima and Amami Islands- (Tominaga, T.)
15. Significance of the Preservation of Crop Genetic Resources in the Islands of Kagoshima (Orjo, M.)
16. Sugarcane Cultivation in the Islands of Kagoshima (Park, B. J.)
17. The Effect and Problems of Attracting Aquaculture Capital -A Case Study of the Koshiki Islands- (Torii, T.)
18. Renewable Energy and Lifestyle Change -An Example of Yakushima Island's "Zero Emissions" Initiative- (Ichikawa, H.)
- Column 2: Edible Seaweeds in the Island Life (Terada, R.)

Nature

19. Nature in the Islands of Kagoshima (Kawai, K.)
20. The Kuroshio -Its Physical Aspect and Roles in Kagoshima's Nature and Culture- (Nakamura, H.)
21. Volcanic Island Chain South of Kyushu, Japan (Kinoshita, K. and Sakamoto, M.)
22. Biodiversity in the Islands of Kagoshima (Okano, T.)
23. A Review of Insect Fauna Reports for the Islands in Kagoshima Prefecture (Sakamaki, Y.)
- Column 3: Vertebrate Fossils from the Islands (Nakaya, H.)

学生奮闘記

国際協力を通して足元をみつめなおす ～私のこれまでとこれから～

谷口光代（鹿児島大学大学院保健学研究科）

『助産師になって、いつか海外で困っている人を手助けしたい』それが小学生からの私の夢でした。助産師として日本で働いていましたが、海外への夢は捨てきれず、青年海外協力隊に応募しました。その結果採用され、アフリカのモロッコで助産師として2年間活動しました。言葉や文化が異なる場所で生活するのは想像以上に大変で、悩み葛藤した時間が大半を占めていました。その中でも些細なことに喜び、感動し、今では大変だったことも楽しい思い出に変わっているのが不思議です。また、言葉は通じなくても心で通じ合うことができること、私を家族同様に受け入れてくれたモロッコ人の優しさなど、数多くのことを肌で感じ、経験することができました。現地での活動は、自分のもっている知識・技術を提供、指導することだと思っていましたが、日本の医療技術をそのままモロッコに提供しても通用するはずがありません。その国の文化、環境に適した方法があり、その方法を更により良いものにするために現地の人とお互い持っている知識、技術を共有し最大限に活かしていく、それこそが『協力』だということに気づきました。「指導する」と思っていた最初の気持ちを今思うと恥ずかしく、現地の人から教わり、学んだことの方が多かったです。自国や自分自身をみつめなおすきっかけとなり、もっと視野を広げ、様々なことを学びたいと思うようになり、大学院への進学を考えるようになりました。

日本に帰国してからは、大学院への進学を考えつつ、離島へき地医療を経験したくて鹿児島の離島で勤務しました。世界からみても日本の周産期医療はトップレベルであり、自分自身が海外から日本の医療をみてあらためて誇りに思い帰国したものの、離島には様々な問題が山積みで、日本の中で医療の地域格差があることを目の当たりにしました。これらの思いや経験から、現在大学院で、離島の緊急母体搬送をテーマに研究をしています。

大学院では、全学横断的教育プログラムがあり、『島嶼学概論Ⅰ・Ⅱ』を受講しました。私は鹿児島で生まれ育ったものの、これまでに訪れたことのある離島は数箇所。この講義では実際島に行き、島について学ぶことができます。他の研究科の先生や学生と交流できるのも醍醐味だと思います。私は、社会人から学生になることに抵抗感がありましたが、今こうして大学院で学べていることや、素晴らしい先生方や同僚と出会うことができとても感謝しています。私の幼い頃の夢は現実のものとなりましたが、それはゴールではなく、『きっかけ』になっており、私の挑戦はまだまだ続きそうです。



モロッコの活動先の病院スタッフと一緒に



島嶼学概論Ⅰの研修で訪れた硫黄島

島嶼研シンポジウム 「島フィールド学の蓄積・展示・展開」

平成 25 年 3 月 2 日（土）に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・鹿児島大学総合研究博物館主催でシンポジウム『島フィールド学の蓄積・展示・展開』が稲森会館で開催されました。今回はポスターセッションも行われました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。



ポスターセッションの風景

基調講演

カヌーと伝統的航海術—オセアニアの資料の 展示と公開—

須藤健一
(国立民族学博物館)

オセアニアで島嶼間航海や漁撈活動を担ってきたカヌーと航海術は 20 世紀にほぼ消滅した。しかし、その伝統の知と技を今に伝えてきた島があり、ミクロネシアのサタワル島である。サタワルの航海術は、ハワイなどポリネシアの航海術の復元と創造をもたらした。

国立民族学博物館では、1970 年代からサタワルで伝統文化の調査研究と民族資料の収集を行い、その保存、展示および公開につとめてきた。それは、①カヌーの建造過程の調査、記録

化と収集・展示、②カヌーと航海術の映像撮影、編集、ビデオテーク公開、③航海の神話・伝説などの口頭伝承の採録、文字化と日本語・英語への翻訳といった内容である。②、③の成果は現地へ還元し教育に役立っている。

現在、本館では収集・整理・保存している映像音響や記録情報などの資料を現地還元し、現地の文化の活性化や多世代間の文化伝承に役立てる具体策を練っている。

報告

1) インドネシアにおけるフィールドワーク： 島々に未知のアリを求めて

山根正気
(鹿児島大学総合研究博物館)

インドネシアはアジア熱帯に位置し、大小 1 万 8 千を越す島々からなり東西の距離は 5,110km におよぶ。面積の半分以上を占めるスマトラ・カリマンタン・ジャワは、マレーシアとともにスンダランド地域と呼ばれており、共通した生物相をもつ。東端のパプア州の生物相はオーストラリアの要素をもつが、同時にマレー系の種も多数生息し、また固有性が高い。スンダランドとパプアの間は生物相の移行地帯でワラセアと呼ばれる。インドネシアのアリ相は 19 世紀の中葉から調べられ、多数の属や種が記載・記録されてきたが、地理的広がりがありに大きいため、未だ正確な種数は判明していない。演者は 1982 年からインドネシア産アリ類の分類と生物地理を研究して来た。今回は、インドネシアにおけるアリの分布の概要、クラカタウ諸島におけるアリの再移住プロセス、アリ研究者ネットワーク、標本の安全な保管庫としての博物館の役割について紹介する。



基調講演をされる須藤先生

2) 島フィールド学の蓄積とデータベースネットワーク構築

河合 溪

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

島は海に囲まれ、狭隘性、脆弱性という特徴を持ち、そこには独自の自然、文化、社会経済システムが存在しており、「島はひとつの世界」と捉えることができる。また、島は様々な環境変動の影響を強く迅速に受ける地域であるため、「島は世界の縮図」とも考えられる。つまり、世界が抱える様々な環境変動に対する影響を推察し、その適応策を提言する場所として、「島嶼」域は最適な地域といえる。

一般に、フィールド研究の結果、文献、写真、サンプル、位置情報などの成果を得ることができる。これらをデータベース化することで、情報を整理し、他研究者との情報共有ができ、簡単にデータの比較を行う事ができる。特に島においては小さな単位で情報をまとめることが可能なため、島単位での情報比較をすることが可能である。

現在、国際島嶼教育研究センターでは鹿児島県島嶼域とマイクロネシアで研究を行っている。ここにみられる地理的影響もデータベースを用い島単位で比較することで、様々な影響を簡単に考察することができる。本報告ではこの様なデータベースをつかった発展的な利用とデータベース作成の困難さについて考察を行う。

3) 島の活性化とともに生まれた口永良部島歴史資料館

宇都 修

(屋久島町立金岳中学校)

口永良部島は、屋久島の北西約 12 km に位置し、屋久島国立公園に属している。面積 35.8km²、周囲 49.7km で、ひょうたん型をしており、南東部中央には昭和 41 年に大爆発を起こした「新岳 (657m)」が、今なお噴気をあげている。

「口永良部島歴史資料館」は島で唯一の金岳中学校内にあり、口永良部島の文化と歴史が集約されている。資料館が完成したのは、平成 9 年 3 月。過疎化と高齢化が進む中、貴重な資料を埋もれさせてはならないとの思いから、当時の金岳中学校木原常義教頭と畠盛杉さんを長とする高齢者学級が立ち上がったのが資料館整備の始まりである。常日頃から口永良部島に残る石器や土器、農業・林業関係の用具、昔話や火山爆発の歴史書などの情報収集に努め、週末を中心に協力依頼に奔走した。当時の上屋久町教育委員会(現 屋久島町教育委員会)の協力も得て整備された資料館は、今でも島を訪れる人々の学舎となっている。

4) 島に出かける博物館

金井賢一

(鹿児島県立博物館)

鹿児島県立博物館は、1995 年から移動博物館を実施している。これは自然史系博物館から遠い地域の方々に、本物にふれる機会を増やしてもらいたいという目的で始められた。この事業は 5 年ごとに見直されており、その実施内容も次第に変化しているため、ここでは 2012 年 11 月に喜界町で行った移動博物館を例に説明したい。

今回は展示、楽しい実験、自然紹介授業、自然観察会、星空観察会、自然講演会という内容を実施した。特に自然講演会では普段意識することの少ない喜界島の自然を紹介するため講

師を招聘したほか、中・高生による「喜界島に侵入する昆虫に関する研究」についてポスター発表を行う機会も作った。この研究は学芸主事が5月、7月と喜界島を訪れ、研究内容の方針決定や実際の調査についての助言や支援などを行ってきた。

移動博物館の抱える課題として「費用の確保」「一過性になりやすい」などが挙げられるが、一つでも多くの地域に出かけられるように工夫しながら子どもたちに感動を届けられるように努力していきたい。



金井先生、宇都先生、河合先生、山根先生、須藤先生、司会の山本（左から）

国際シンポジウム 「柳田國男の民俗学と東アジアの『海上の道』を問い直す」

平成25年7月2日（火）に韓国の比較民俗学会主催、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター共催で国際シンポジウム「柳田國男の民俗学と東アジアの『海上の道』を問い直す」が開催されました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。



集合写真

1) 写真で見る奄美群島の民俗と生活（李允先；国際島嶼教育研究センター）

2) 柳田國男と『海上の道』：『海南小記の旅』から100年、いま日韓でできること（梁川英俊・鹿児島大学法文学部）

3) 喩としての『海上の道』：詩的言語の空間想像力（鶴戸聡・鹿児島大学法文学部）

4) 韓国音楽との比較を通して見る奄美島唄の特徴と音楽語法（金惠貞・京仁教育大学）

5) 奄美における防災と社会関係（孟憲晨・鹿児島大学法文学部）

6) タンゴルとノロの社会的位相（李京燁・木浦大学）



会場の風景

島嶼研シンポジウム 「地域を変えるカー情報技術による島の振興ー」

平成 25 年 7 月 6 日 (土) に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・学術情報基盤センター主催で鹿児島大学シンポジウム『地域を変えるカー情報技術による島の振興ー』が開催されました。当日は 120 名を超える皆様方に御参加いただき、盛会となりました。



会場の風景

基調講演

離島の情報化は変革を生み出しているか

横山正人

(長崎総合科学大学 環境・建築学部)

離島に代表される条件不利益地域も、次第に情報通信インフラ等の環境整備が整いつつあり、情報通信技術の急速な進化に伴い、地域情報化推進に向けた新たな局面を迎えようとしている。実際、各地の離島では、ICT の利活用推進に向けた様々な試みが実践されつつある。しかし、はたして地域の課題解決や地域活性化等、地域を変革する道具として、情報化は貢献しているのだろうか。長崎県の離島地域を題材にしなが、現状課題や今後の方向性について論じてみたい。

報告

1) クラウド・コンピューティングが離島を変える

三友仁志

(早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科)

「人口規模の小さい離島では、採算が取れないので、ICT を利用した先進的なサービスは期待できない」と諦めていないだろうか？

その原因のひとつは、地域の課題を地域の中で解決しようとしていることにあるように思われる。限られた人口では、事業としての採算が取れないため、良いアイデアも費用負担の問題から、実現可能性は低い。しかし、先進的な取組を行っている他の地域に相乗りする形であるいは他地域と共同で、あるいは同様の課題を抱えるほかの離島や条件不利地域とともにサービスを利用することで、規模の経済性を実現し、利用可能性が高めることができる。供給者側にとっても、供給のインセンティブが高まる。本発表では、教育を中心に、クラウドによる「相乗り効果」によって、離島にも利便性の高いサービスの利用環境を実現するための条件と事例を紹介する。



横山先生、三友先生、升屋先生 (左から)



会場からの質問

2) ゼロ地域からの脱却～最先端のブロードバンドアイランド

升屋正人

(鹿児島大学 学術情報基盤センター)

3つの有人離島からなる三島村と、7つの有人離島からなる十島村では、ブロードバンドの整備が遅れていたが、最近になってようやく公設公営方式によるサービスが開始された。三島村では本土と結ぶ海底ケーブルを敷設し、島内は簡易埋設 FTTH 方式による整備が行われた。十島村では通信事業者の専用回線サービスで本土と結び、島内は FWA 方式による整備が行われた。これにより、三島村と十島村では全世帯でブロードバンドサービスを利用できるようになった。ブロードバンドゼロ地域からの脱却を果たしたこれら地域の最先端の情報通信基盤を概説する。

3) 教育情報化に向けた与論町と NTT グループとのトライアル

西田文比古

(NTT ラーニングシステムズ株式会社)

鹿児島県最南端の与論町では、2011年度から教育クラウドやタブレット機器、電子情報ボード等のICT環境を活用した実証が進められている。わが国は世界屈指のブロードバンド大国だ

が、一方で公的分野、中でも教育や医療・健康分野などでのICT利活用には他国に比べ遅れが目立っていた。教育におけるICT利用シーンや推進上の課題の抽出、共有を目指し、NTTグループが全国5つの地域10の公立学校とともに開始した「教育スクウェア×ICT」トライアルにおいて、与論町の3小学校で実践された取り組みを紹介するとともに、島嶼部での教育におけるブロードバンド活用の課題と将来像を考える。

4) IT系企業で盛り上がる奄美大島の奇跡

勝 眞一郎

(奄美市情報通信産業インキュベーションマネージャー・サイバー大学 IT総合学部)

奄美群島の産業振興の3本柱は、観光、農業、情報通信である。各産業の下支えとなる情報通信産業の集積拠点として奄美市は2012年4月に「ICTプラザかさり」をオープンした。開所半年で8室全室が埋まり、新規就業者も15名を超えた。全国のインキュベーション施設で空室が目立つ中で、どのようにしたら利用が増えるのか、全国の自治体からの見学者も増えている。奄美市の情報通信産業インキュベーションマネージャーを務める勝が、企業誘致や仕事誘致をどのように進めてきたのか、施設運営はどのように行っているのかについて具体的に紹介する。



西田先生、勝先生（左から）

 国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 137 回 2013 年 4 月 15 日

有孔虫に魅せられて 40 年

八田明夫

(鹿児島大学教育学部)

学生時代のフィールドから有孔虫化石が出てきたことが、ことの始まりです。千葉県に住んでいた時は、房総半島の有孔虫化石、タイ国の古生代後期の有孔虫化石を調べました。鹿児島大学に赴任後は、種子島南部から産出する有孔虫化石と鹿児島県各地の現生有孔虫を調べました。内地研究員として琉球大学に滞在し、石西礁湖の有孔虫を研究してモノグラフを作成しました。島嶼研の前身の南海研時代からパラオ・ミクロネシア・パプアニューギニアへの調査隊に参加し、現生有孔虫を調べました。理科教育の担当者として、有孔虫の理科教育への活用について研究・提案しました。本報告では、調査地域から産出した有孔虫について紹介・解説します。

第 138 回 2013 年 5 月 11 日

フェリックス・ガタリのエコゾフィーと現代哲学

ステファヌ・ナドー

(ヴィル・エドヴァルド病院・小児精神科医)

フェリックス・ガタリ (1930-1992) は、精神分析、社会運動、政治思想など多彩な分野で活躍した 20 世紀後半の思想家です。2011 年のフクシマ原発事故以後、ガタリのエコロジー思想を国際的に再評価する動きが高まっています。精神・社会・自然を互いに切り離すことのできない「エコロジー」として捉え直し、それら包括的に捉える知のあり方 (エコゾフィー) を追求したガタリ思想は、現代世界のあり方を考えるうえで重要な指針を与えるものです。今回の発表では、そのようなガタリ思想の解説を

つうじて、エコロジー問題に対する現代哲学の果たすべき役割とその方向性について議論をしたいと思います。

第 139 回 2013 年 5 月 27 日

韓国における「南道 (ナムド)」の文化的特徴

李 允先

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

「南道 (ナムド)」(地理的には「全羅南道」を指すが、「ナムド」はより広い範囲を覆う文化的概念である)とは韓半島の南西地域である。この南西地域はその地形から「北東アジア地中海」と呼ばれている。韓国の南海には 3 千を越える島があり、そこにはさまざまな文化様式がある。最初に話したいのは、干潟と島嶼についてであるが、塩田も多くある。次に指摘したいのは、食文化である。塩分を含む海産食品は南アジア、中国南部、日本、韓国に広がっている。南道の人々はキムチのような唐辛子が入った料理を好むが、同じ韓国でも北部の人々は唐辛子料理は好まない。このことは料理にも南北で異なる様式があることを示している。第三に指摘すべきは、巫女 (ムダン) の祭祀と舞踊である。巫女には 2 つのスタイルがあり、それは漢江 (ハンガン) により南北に分けられる。北部の舞踊スタイルは跳躍を伴い、ひとつの祭祀のために 20 もの色とりどりの衣装を使う。南部の巫女は衣装はひとつか 2 つしか使用せず、しかも白一色である。彼女の仕事は、ただ歌い、音楽を奏で、踊ることだけである。第四の論点は、歌と音楽である。私見によれば、この点で南道は沖縄や奄美大島の巫女と共通性があるように思える。最後は葬儀と埋葬である。ここでは南道の 2 つの異なる埋葬様式について述べる。今日では文化様式はさまざまに混淆している。個人的に関心があるのは、韓国南部と南日

本の文化的関連性についてであるが、それは明らかに南太平洋の海洋および島嶼文化に由来するものだろう。

第 140 回 2013 年 6 月 17 日
ケルトの視点から読む F. スコット・フィッツジェラルド

千代田夏夫
(鹿児島大学教育学部)

F. スコット・フィッツジェラルド (1896～1940) について、母方のアイルランド移民の血筋についてはしばしば言及されるものの、その出自が彼の自意識や作品にいかに関与しているかについて、

したかについての先行研究はほとんど見られない。本発表では作家のバックグラウンドとしてのケルトの存在に注意しつつ、ケルトという概念自体の重要な構成要素でもある「島」のイメージに特に注目して作品分析を行いたい。代表作 *The Great Gatsby* (1925) の最終盤において 17 世紀オランダ水夫の眼差しを借りながら新世界を俯瞰してみせる作家にとっては、アメリカもまた一つの島ではなかったか。ケルトという概念をもって作家にとっての島の意義を辿るとき、フィッツジェラルド独自のロマンティシズムとは何であったかという、より大きな問いを解く手がかりもまた得られよう。

お知らせ

(1) 着任

木浦大学島嶼文化研究院の李允先 (LEE, Yoon Sun) 氏が外国人客員教授として 5 月 7 日に着任いたしました。研究テーマは「奄美大島における民俗歌謡、民俗舞踊および儀礼に関する研究」、専門は「民俗学」で、2014 年 2 月 28 日まで滞在予定です。



ミクロネシア連邦チューク州における調査

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.34, No1, 2013

Research Papers

KADER Md. A., BULBUL M., HOSSAIN Md. S., YOKOYAMA S., ISHIKAWA M. and KOSHIO S.: Improved Utilization of Plant By-Products Mixture by Supplementing Dietary Bamboo Charcoal for Juvenile Amberjack *Seriola Dumerili*

JOHNSON H. and KUWAHARA S.: Neo-Traditional Ensemble Drumming in the Amami Islands: Mapping New Performance Tradition

Notes

INOUE-SMITH Y.: Aspirations for Career and Marriage among Young Japanese Women: The Case of Okayama University

～フィールドこぼれ話～

「船に乗る仕事」

小針 統 (水産学部)

船に乗る仕事ですというと、それはたいへんですねとよくいわれます。海の上で暮らしたことがない人にとってみれば、想像すらできない世界なので当然のことでしょう。船に酔ったらどうすればいいのか、どんな場所でどんな人と生活するのか、嵐がきたら生きて戻れるのか・・・などなど。海では逃げ場がないので、仕事はもとより生活の全てが自然に支配されます。

確かに、海の仕事は楽ではありません。多くの時間・人手・資金をかけていく場所なので、やれる時には睡眠をとらずに仕事をつめこみまわります。もちろん、船酔いしたなどいえる余地などどこにも見当たりません。なので、この仕事を続けていると肉体的・精神的にタフにはなるかもしれません。

しかし、辛いことばかりでもありません。いや、不思議と楽しかったことや印象深かったことのほうが多く思い出されます。在外研修中には、アメリカ西海岸で日本からの震災漂流物に出会いました。海から出ている部分には何もなかったのですがたまたまの浮きかとおもったのですが、拾い上げてみると水面下にはびっしりとエボシガイがくっついててキモチ悪いことこの上なし。これを見た瞬間、海坊主のモデルはこれなんだと独りで納得してしまいました。霧深い北洋では夜になると漆黒の闇になるのですが、アメリカ人の友だちに連れられて船の外を見るとたくさんの光が海の中に・・・。ハダカイワシや動物プランクトンが生物発光するからなのですが、海の中に空を見た気分でした。そういえば、この時にはエンジンを冷却して暖かくなった海水でみんなとジャグジーしたっけ。地中海では経済状況の悪いスペインの研究船に乗ったのですが、前菜・メイン・デザートと続いてすごくゴージャスでびっくりしました。お金がなくても気持ちは豊かになっていく文化に感激しました。

うちの大学の練習船でも美味しく楽しいご飯を出してくれますよ。カレー・オムライス・チキン南蛮・ラーメンなど匂いで待ち遠しくなるご飯だけでなく、アイスクリーム・ゼリー・フルーツなどのスイーツも出ます。

そういえば、1つだけしんどいことを忘れてました。陸との連絡が取れなくなるので、家族が恋しくなります。

どうですか？一生に一度は海に出てみるのも悪くないですよ。新しい刺激が欲しい時、珍しい体験をしたい時、あるいは生活に疲れた時など、そんな時にはどうぞ水産学部の練習船をご利用ください。



水産学部練習船の昼食メニュー



漁に使う浮きに付いたエボシガイ

🌿 「とうがらしに旅する」 🌿

第七回 「Rokete はロケット？それとも・・・」

2010年国際学会に参加するため初めてフィジーへ飛んだ。フィジーのビチレブ島で現地調査をしている鹿大の研究者グループと一緒にだったので、彼らが調査をしている村へ連れて行ってもらった。この村では唐辛子のことを「*rokete*」と呼ぶようだ。ん？ロケテ？？一緒にいた研究者の一人は、辛くて「ロケット」のように飛びそうになるからじゃないか、と真顔でいう。しかし「*rokete*」と聞いた瞬間、南米におけるクロタネトウガラシ (*Capsicum pubescens*) の現地名「ロコト (*locoto, rocoto*)」が僕の脳裏をかすめた。もしかして南米から持ち込まれた？コロンブスの新大陸到達以前に唐辛子は太平洋諸島に伝播していた？次から次に想像が膨らんでゆく。でも言語学者には絶対怒られるだろうな。例えば字面（発音）が似ていても、全く違う語源である場合も多々あるからだ。それではちょっとサツマイモの伝播ルートを見てみよう。サツマイモの伝播ルートは各地の呼称から、バタタス・ルート、カモテ・ルート、クマラ・ルートの3通りが想定されている。その中でもクマラ・ルートは、大航海時代以前に南米の先住民が太平洋諸島へサツマイモを伝えたのではないかと、あるいは太平洋諸島民が南米へ到達しサツマイモを持ち帰ったのではないかと、という伝播経路である。サツマイモの原産地付近には、唐辛子だけではなくカボチャ類など現在でも非常に有用な栽培植物が多く分布している。サツマイモのみが太平洋諸島へ伝播したというのは信じがたい。他の作物も合わせて伝播したと考えるのが論理的だろう。現在のところ言語学的な証拠は何もない。今後研究が進展し、*rokete* は「ロケット」ではなく「ロコト」です、となれば、新たな歴史の幕開けかも。（山本宗立）

編集後記

鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム・島嶼学教育コースのオープン科目として、太平洋島嶼学特論を今年度前期に新規開講いたしました。チューク・グアムにおける海外研修が主で、9月16日から23日にかけて研修を実施しました。僕も初めての授業でときどき。受講した学生のうち3人が海外旅行未経験でときどき。かなりの珍道中でしたが、学生は現地から、そして僕は学生から、たくさんのことを学びました。来年度以降もぜひ続けたい授業だと思いました。（山本宗立）



太平洋島嶼学特論（チューク環礁にて）

島嶼研だより No. 66 平成 25 年 10 月 25 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>